

鎌倉亀谷新清涼寺釈迦堂の定仙について

「生没年と出自についての一考察」

研究員 大八木 隆祥

筆者は、鎌倉亀谷の釈迦堂を拠点に精力的な受法活動を行つた真言僧定仙（一二三三～一三〇二）について数年來研究をしている。以前の公開講座でも称名寺聖教（神奈川県立金沢文庫保管）の識語を中心にその受法活動について概観したが、今回は称名寺聖教以外の文献・遺物等によって新たに確認しえた事実を交え、今一度定仙の生没に係る状況と出自について分かりうることを整理した。

生年については定仙自身が記した複数の識語によって貞永二年または天福元年（一二三三。四月十五日改元）と確定した。

没年については文献資料が無く、これまでは称名寺聖教中最後に定仙の名が記された『伝法』の正安三年（一三〇一）十二月二十日以降であり、また『西大寺光明真言過去帳』には乾元二年（一三〇三）七月十二日に没した忍性より前にその名が記されていることから、この間に没したものと推測するよりほかなかった。一方で、伊豆真珠院には「定仙大和尚塔」と記された石造五輪塔がある。その造塔日が正安四年（一三〇二）四月二日とあることから、この塔が件の定仙の墓碑であるとすれば、この日を没年月日の下限とすることができるわけである。そこで、この塔が鎌

倉亀谷釈迦堂の定仙のものであるかを検証した。すると、塔の記銘の内「石城結縁衆」として造塔に関わつた人々の名を列記したその筆頭に「定禪大徳」という名があり、この人物と鎌倉亀谷釈迦堂の定仙との関係を示す資料を諏訪の仏法紹隆寺聖教や大阪市立美術館所蔵の『覚禪鈔』等から確認することができた。これにより、伊豆真珠院の「定仙大和尚塔」は鎌倉亀谷釈迦堂の定仙の墓碑であることが確実となった。

ただし、造塔供養日から没年月日の最下限が確定しただけで、具体的な命日は依然不明のままである。『東草集』等中世の表白集を見ると三十五日や四十九日忌での造塔供養の例が多く見られることから、おそらくは正安四年（一三〇二）に入って割と早い内に没したであろうことが推測できるのみである。

出自については、定仙には伝記資料が無いため明らかでない。先に確定した一二三三年の出生の後、称名寺聖教にその名が登場する文永十一年（一二七四）四十二歳までの足跡は不明である。そこで、野沢に亘る七流諸方を十人以上の人師から相承した定仙の受法活動をヒントにその出自を考えてみたい。

定仙が受法した人師には、今では一法流の祖としてその名が挙げられる重要な人物が多く、例えば北条得宗家出身の頼助などは、安祥寺流正嫡であり仁和寺御流も相承し、時の宗教界のトップである鶴岡別当職に補せられるほどで

あった。すなわち定仙はそのような人物たちから受法・所持本の借覧・度々の面会が許される立場にあったという事である。さらに、定仙が住した釈迦堂は弘長二年（一二六二）に西大寺叡尊が鎌倉に下向した際に止住した寺であり、その選定理由は領地やパトロンなどの経済的基盤を有さないことであった。定仙はその様な寺に住みながらもこれだけの受法活動を行い得る経済力を有していたと言える。

ちなみに定仙の墓がある伊豆真珠院が北条氏邸のあった守山の麓、北条氏の菩提寺である願成就院の並びにある寺であるということも重要である。受法活動に伴う経済力・人脈、そして伊豆守山との関係。それらを併せ考えるならば、定仙は北条得宗家に極めて近い人物であったと推測しうるのである。